

都道府県番号	41
都道府県名	佐賀県

()

学校名及び規模

佐賀大学文化教育学部附属小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	0	18	27
児童数	120	119	116	120	119	115	0	709	

実践研究の概要

<ul style="list-style-type: none"> ・ 主題 学びが育つ学習環境デザインの研究 ～教科担任制を活用して～ ・ テーマ設定の趣旨 「環境」を従前のとらえ方ではなく、用意されるカリキュラムや指導方法・評価方法、そして人材や時間、そこで行われるコミュニケーションなども含めて「環境」としてとらえたうえで、児童の理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導を求め、次の点に研究の力点を置く。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 学校カリキュラムの組織化と運用 (2) 系統性を重視した指導と評価の在り方 (3) 人的・時間的な工夫としての教科担任制の導入 特に、教科担任制では、次の点をねらいとする。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 教師の個性・特性の発揮 (2) カリキュラム評価につながる系統的で一貫性のある指導 (3) 全ての児童に各教科等の研究の成果が反映されること (4) 一人一人の児童の学びを多数の教師の目で見守っていくこと
--

実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

(1) 研究体制

学習環境部	教育計画委員会（行事，時間割，校時表等の改善） 学習環境委員会（施設設備，人材活用等の工夫）
研究部	研究委員会（企画・立案，理論構築） 各教科等部（教科特性に基づく指導の改善） 四附属合同研究会 （情報交換，共通理解，カリキュラムの系統性・一貫性の創出）

(2) 配慮事項

指導法研究ではないので、学校カリキュラムを組織化するという前研究の考え方を実際の学校運営に生かせるように学習環境部をおいた。

各教科等の特性を生かした研究、教科等レベルでの小・中の系統性を明確にする研究が実現するような研究部内の編成を工夫した。

() 実践研究の内容

(1) 実施学年・教科

低学年 原則として、音楽・図工・体育

(学校生活への慣れを配慮するため)

中学年 原則として、社会・理科・音楽・図工・体育

(習熟が必要な教科への配慮のため)

高学年 原則として、国語・社会・算数・理科・音楽・図工・家庭・体育

(どの教科も対応できる学年であり、成果を確認するため)

生活・道徳・特活・総合は、基本的に担任が指導する。

(2) 教科担任制について、保護者・児童・教師に対して意識調査(年3回)

() 成果と課題

(1) 成果

人的・時間的な工夫としての教科担任制の長所・短所が検討できた。

長所

【教師の変化】

- ・教師の専門性や特性が生かされ、各教科等固有の魅力を伝えやすい。
- ・45分の授業を魅力あるものにするために、時間を有効に使う。
- ・実態に合った教材開発をこれまでよりも工夫するようになった。
- ・児童の言動について教師間の共通の話題が増え、適切な対応の仕方を話し合うよう心がけている。
- ・開かれた学級、たくさんの目で児童を育てていく大切さを感じる。

【児童の変化】

- ・各教科等の学び方や考え方の大切さが伝わっている。
- ・時間のけじめを以前より考えるようになった。

短所

- ・小学校の場合、問題行動への対応がその児童の生活状況などの背景をくわしく理解しておかないとうまくいかない。そのため教科担任では、明らかに元気がない、落ち着きがなくなったといった児童に対しても突っ込んだ対応を適切に行うことが難しい。上学年になると担任の学級に授業に入らない日も出てくることなどから学級経営の不安を持つ教師や保護者が出てくる。
- ・本校の場合、18学級に対して授業を受け持つ教師が講師を含めて24名であり、学校施設の老朽化も進み、特別教室やオープンスペースが1~2の現状である。このように加配教員がなく、特別教室も少ない本校では、時間割編成さえ困難を極めた。また、行事等を加除修正する場合でも、現在の教科担任制の導入状況では、柔軟な対応をするには無理がある。教師の人数及び

施設が、現在の状況のままでは、現在の教科担任制の導入状況が精一杯である。

(2) 課題

担任児童へのきめ細かな対応

- ・朝や帰りの時間等の活用を始め、どのように時間確保の工夫をするか。
- ・少ない時間で担任児童とどのようにして深く関わるか。
- ・1つの学級に関わる複数の教師のさらに効率的・効果的な打ち合わせや情報交換をするには、どのような内容と方法の工夫・改善を行えばよいか。

教科担任による授業を減らした場合との比較研究

- ・今年度は、高学年の場合、原則として自分の専門教科と道徳・特別活動・総合的な学習の時間のみを受け持ち、それ以外の時間もほとんど他のクラスの授業に入っていた。これよりあと1～2教科担任が受け持った場合、どのような変化があるかを検討する。

(3) 意識調査の結果から

年度当初

- ・担任との関わり、細やかな対応に対して不安はあるが、専門の先生の授業に対する期待は大きい。(保護者)
- ・体育の見学者への対応など一人一人の児童の学習面以外での情報不足、前の時間からの引継ぎの難しさなどへの不安がある。(教師)

年度末

- ・授業がおもしろくなった。(児童、保護者)
- ・個々の児童への対応には、思っていたよりは困らなかった。しかし、中学校のその面でのノウハウを積極的に取り入れるなどの改善を図る必要はある。また、算数部の3人が5年生の3クラスを受け持つ場合などは、比較研究・共同研究がとてもうまくいく。(教師)
- ・次から次へと授業が変わっていく、慌ただしい感じがする。(児童・教師)

() 成果の普及方策

(1) 研究発表会等の実施

研究発表会 平成14年6月14日(金)実施

学習公開 平成14年12月5日(木)実施

(2) ホームページの作成

内容：学校の沿革、研究発表会案内、研究構想、カリキュラム、活動紹介、リンク集など

(3) 研究速報「クレサス」の発行(年3回)